

せともの祭の戦前・戦後 ―ラジオ番組「大阪アラベスク」のSP音源をめぐって―

澤井 浩一

はじめに

大阪府中央区の坐摩神社境内にある末社、陶器神社では毎年七月にせともの祭が行なわれ、平成二十年度には大阪府指定文化財（無形民俗）に指定されている。この祭りは、西横堀の瀬戸物町に集まっていた瀬戸物問屋が主体となり、江戸時代に、愛宕山將軍地蔵の地蔵会として始められ、浜辺の空き地に仮堂、張抜の鳥居、紙細工の石灯籠などをつくり、祭りをおこなったもので^①、瀬戸物一式の造り物呼び物であった。明治五年（一八七二）には、地蔵祭停止の大阪府令により地蔵会は廃止されるが、間もなく火防陶器神社の祭りとして復活し、盛衰を繰り返し、「陶器祭」、「せともの祭」と名称も変えながら存続している。

瀬戸物町の愛宕山將軍地蔵や火防陶器神社には火伏の信仰があり、現在もせともの祭では「火要鎮」の御札を付けた笹が授与される。これは、瀬戸物の緩衝材として多く用いられた藁などが燃えやすかったため火を恐れたという瀬戸物問屋の信仰を反映している。

祭りの最大の特徴であった瀬戸物一式の造り物（瀬戸物人形、陶器人形）

は、大坂市中の祭りで造り物を出す伝統を継承するもので、時代の世相を反映し、趣向を凝らした人形やセットが陶磁器で製作され、道修町薬種商の薬品作り物、靱乾物商の乾物造り物とならんで近代大阪には三大造り物と呼ばれ^②、また天神祭と並び称される大阪を代表する祭りにもなり、造り物は大阪の名物とも称された。

全盛期には、併設される瀬戸物市に多くの出店があり、多くの参詣客で賑わったせともの祭だが、造り物の製作には巨額の費用が必要であり、祭りの維持の大きな問題点でもあった。祭りの財政の悪化、環境の変化（陶器商の離散、店構えの変化、交通事情等）により戦後の祭りは縮小し、現在に至っている。

大阪歴史博物館には、平成二十三～四年度を中心に、瀬戸物町のつば善商店およびその経営者の御崎正之氏よりせともの祭の関係資料が寄贈されている。寄贈資料については、『館蔵資料集9 せともの祭造り物写真等資料』^③において、瀬戸物一式造り物（陶器人形）のガラス乾板および焼付写真、造り物下絵を中心に紹介した。本稿は、そこでは紹介できなかった音声資料の翻刻を中心としながら、あわせて戦前・戦後のせともの祭の盛

衰について紹介するものである。

一 大阪アラベスク「大阪と陶磁器」

つば善商店から寄贈された資料群に含まれていたのは二枚組のSPレコードである。盤面には、昭和二十九年（一九五四）二月十三日録音、十六日に新日本放送（NJB）でラジオ放送され、つば善商店の御崎善右衛門（一八七六—一九六二）が出演した旨の表記がある。SPレコードなので、片面約三分、合計約一二分の録音時間となっている。内容は、瀬戸物町の歴史やせともの祭についての対談を収録している。

出演の御崎善右衛門はつば善商店の二代目で当時七十九歳、録音でも語られる通り、明治二十二年、十四歳から大阪の瀬戸物問屋で働くようになり、無学であったといわれるが、たいへん研究熱心で大阪の焼物を含む陶磁器や瀬戸物町の歴史について様々な情報を収集し、明治二十九年から『陶業時報』⁽⁴⁾を月刊発行している。この雑誌は一種の業界誌ではあるが、大阪の陶磁器事情や瀬戸物町、せともの祭の歴史を研究する上で貴重な史料となるものである。この対談の相手は、当時の大阪府陶磁器商業協同組合の理事長であった今井時之助（当時六十一歳）である。今井は、つば善商店と同様に瀬戸物町の陶器商である今井陶器店の主人で、戦後に『陶業時報』に就いた『大阪陶報』⁽⁵⁾を発刊している。

盤面に記された通り、この録音は後に毎日放送と改称する新日本放送のラジオ放送番組のためのものであった。放送当日の新聞の番組欄で確認すると、午後一時四十五分からの十五分番組で、「大阪と陶磁器 御崎善右衛門ほか」（毎日）、「大阪アラベスク」（朝日）、「大阪アラベスク大阪陶磁器」

（読売）、「大阪と陶磁 御崎善右衛門他」（産経）とあり、「大阪アラベスク」という郷土番組であったと判明する。

「大阪アラベスク」は、昭和二十七年九月～昭和三十年七月まで放送された大阪地方色の濃い番組である。牧村史陽、上田長太郎、前田勇、岸本水府らが出演し、大阪言葉や大阪の今昔について語るなど座談形式で進められた。番組後期には大阪の今昔を放送劇に仕立てた構成に変更されたとされる⁽⁶⁾。戦後の民放ラジオ放送の初期番組であり、ここで紹介するSPレコードは大阪の放送史上に位置づけられる音源資料としても意味がある存在と考えられる。（脱稿後、録音風景の写真が発見されたが非掲載）

以下に、音源からの翻刻を紹介する。つば善商店には、この放送台本の下案と考えられる原稿用紙が残されており、実際の録音とは異なる部分も多いが、音源からの聞き取りが不明瞭な箇所および補足的情報が含まれる部分については、原稿から補訂して記すこととしたい。

「SPレコード音源からの翻刻」

※（ ）は筆者、「」は台本下案原稿からの補筆である。

「大阪アラベスク」大阪と陶磁器 出演：御崎善右衛門、今井時之助
新日本放送（NJB）昭和二十九年（一九五四）二月十六日午後一時四十五分～二時放送（二月十三日録音）
（1A面）

（御）私は十四「歳」の時にね、明治二十二年（一八八九）でしたな。大阪、みんなで暮らしかけたんです「セトモノ町で暮し陶器ニタツサワッテキマシタ」。

（今）はあ。

(御) 今ご専門通り、ずっと瀬戸もん、どれくらいしてるんですか。今井さんが今度『大阪陶報』をやられて「発刊されて」、郷土陶器について色々調べておられるでしょ。大阪と陶器の起こりや年代については、おわかりになりましたか？

(今) はあ、わたくしはまだ大正の初期からのことより、よく実地に見聞しておりませんので、ただ古文書によって研究した程度によりますと、(ブザー音) ちょうど今から二七四年ほど前の延宝八年(一六八〇)十月に今の裁判所のところに、肥前鍋島家の上屋敷があったそうですね。

(御) へえ。

(今) そこへ、「御国産」と言って肥前の国元から伊万里焼を船で送ってきたそうですね。それを大阪の陶器商に取り扱わせることになったのが、ちょうど文化四年(一八〇七)の二月からのことだそうです。しかし、御崎さんこそ、業界の長老であり、ことに陶器については趣味深くなかなか研究されてらっしゃるんですが、大阪の陶器の発達のなかに瀬戸物町という名がありますが、その起源をうかがいたいもんですね。

(御) へえ、そうですね、大阪の長堀といえ、あれは材木問屋がある所、(今) はあはあ。

(御) ……(不明瞭部分) もらうわけですが「とすぐに判断するよう」に、横堀と聞くと必ず瀬戸もん屋をやっぱり連想するんです。横堀という名がちょうど陶器の代名詞みたいになってまんねん。

(今) そうですね。

(御) しかし代名詞というた横堀も明治の末期にはだいたい他の商売が入りま

したな。

(今) そうそう、そうですね。

(御) 軒並み、私ら丁稚の時は軒並みちゅうわけにはいかんようになったんですよ。

(今) ふん。

(御) それでも、北は筋違橋、まだもうちよつと北にあったかもしれせんけどな、それから南は四ツ橋の間に百四〇五十軒の同業者が集まった。…(不明瞭部分) ようになった。「私が明治卅九年から発行していた月刊『陶業時報』にもアリマス」

(今) ふんふんふん、そうですね、わたくしはまだその頃のこと、隆盛の時代を、当初知ってましたが、戦時中の統制時代に当時わたくしが商業組合の理事長をしておった関係上、嫌な役目で、企業整理にあって、信濃橋から北はわずか三軒と南に三軒になってしまいましたね。

(御) へえ。

(今) それが、(昭和)二十年(一九四五)「三月」の戦災で全滅してしまっただんです。その上、戦後の都市計画にかかるし、横はちよつと片側町になってしまいましたね、縦にあの大きな八〇メートル道路が通ってしまったものですから、ちよつと南北を両断されてしまいましたね、現在はちよつと二丁ほどのところに一八軒の同業者によって漸くまあ昔の瀬戸物町の面影をしのばせる程度となりました。

(1B面)

(御) わたしが、明治三十九年(一九〇六)から発行している『陶業時報』というのがありますな。

(今) はあはあ、ありますな。

- (御) あれには大抵のことは載ってますわな。
- (今) その時代もちよくちよく拝見してまして。
- (御) その頃、他の地区から見ると、これだけ隣から隣へ同業者が軒を並べとく所は、少ないようすな。
- (今) そうすね。
- (御) ないとは言えんかも知れんけど、まあ何れにしても多いでしょ。
- (今) そうすな。
- (御) そんなんですから、百過ぎの四五十軒も寄ってたというのは、なかなか壯観でっしゃろ。
- (今) それは、ちよつと今では想像もつかんほどの世代差ですか。
- (御) そら、陶器祭りなどに灯りがついたちゅうたら、とても見事なもんです。
- (今) 今はただ、人もよく出て、店も出てますが、あの時分はやはり綺麗でしたな。
- (御) 綺麗です。
- (今) そうでしたな、はあ。
- (御) そいで、その時分は電気は乏しくって、今のように灯りはないんですからな。
- (今) うーん、それで戦後は店の構えや服装なども昔とはまるつきり変わりましたね、それも時代の移り変わりで、良い方へ向かって、新しい傾向でしようけれども、その古い伝統の瀬戸物町にも蛍光灯が輝き、ショーウィンドウや照明に関心をもって参りました。
- (御) えらい変わりましたな。
- (今) 昔の土蔵構えが洋風になりましたり、帳場格子がカウンターになっ

- たり、床を落として椅子式になりました。
- (御) そんなんで、まるつきり変わりました。わたしはまあ、西洋風のものも、何も知りませなんだがな。ちなみに、前垂れの紐でも、あら横堀や、あら道修町や、靱やちゅうことがわかったんです。「服装なども大正初期にはまだ縞木綿の厚司に継雲斎の白紐の前掛を締めた者が有ったが、もうそんな面影は見ることが出来なくなりました。つまり横堀筋瀬戸物やの白紐、道修町薬屋の茶紐、靱は乾物やの青紐の前掛と言へば一見してそれと知られた位のものでした。」
- (今) そうでしたな。
- (御) それが今じゃ、ちよつとわかりにくく、なりましたやろ。
- (今) そうすわ、みんな洋服になつてしもうて。
- (問)
- (御) ええ、しかし「全滅した瀬戸物町と」陶器神社があれだけ復興することは、なかなか大抵ではなかったでっしゃろな。
- (今) ええ、戦災で瀬戸物町がすっかり焼けてから復興するには、まず陶器神社と思ひまして、坐摩神社にもご相談いたしますし、それに今の赤間知事(赤間文三)や中井市長(中井光次)の協賛を得まして、漸く昭和二十六年の七月に横堀の焼跡に、陶器神社をご營繕致しました。
- (御) あれはね、あの横堀、どこまでをと思つて、だいぶん苦心しましたでえ。そら一年せなんだことやけどね。
- (今) いろいろと、あなたの念願だったんだけど、子どもからいつも聞いておつたんですけれども。
- (御) いやいや、ああいう風にしてもろたんで、誠に結構。残りの同業者

も一層励みになろうと思います。

(今) 左様ですな。そして漸くまあ、陶器神社がご宮繕できたなら、今度は陶器祭りを復興して、それからまた瀬戸物人形を一箇所だけ奉納したんですが、翌年二箇所、また三箇所とだんだんに増やしてきました。

(御) そういう風になってますな。

(今) なんせ、あんた、一箇所で一〇万円もかかるんだから、横堀の今の一八軒の店でそれを全部負担するんですから、なかなか並大抵じゃない。

(御) それは、いかんことですな。

(今) わたしがまだ覚えている頃は、この人形も一〇箇所ぐらいありましたが、一体、この盛大なお祭りと、他にあまり類のない特殊な瀬戸物造り人形っていうのは、いつ頃から始まったもんです？

(2A面)

(御) それは、私らが思うのには、余程古いものと思います。今、私が持っている文献では嘉永五年(一八五二)の瓦版(瀬戸物一式造り物番付)がおまんねや。嘉永五年といえますと、今から百年「前」ですかな。

(今) はあはあ、そうですな。

(御) その時でも十何箇所というグルン(グループか)ができてあった。あれだけになるには、容易なこっちゃなかるうと。始めからそれまではない何十年とかかっておった。

(今) それはそうですわな。

(御) それが、立派に毎年毎年やりましたんですからな、しかし似顔な

どを造ることは、よっぽど(余程)それより後にできたもんじゃない。「そうですね、今から丁度百五十余年程前、徳川末期の頃、陶器神社(地藏会の誤力)に奉納したせともの人形が珍しいので人気を呼び、その頃は瀬戸物町も全盛を極めて百五十軒あまりの店が各町毎に腕をきそって、それも人形師にまかせきりでなく皆が手伝って出し物にも智慧を絞り衣裳付に又役者の似顔に苦心したものでありますよ。」

(今) なかなか何ですな。たいへんなんですけど、古い時代にはやっぱり何箇所くらいありました？

(御) それはね。二〇箇所もあつたでしょ。それは信濃町、信濃橋の西は信濃町いうてたんです。それから西へ行きまして奈良屋橋がありますな、あれ奈良屋町っていうのがある、あの方面がすっかりこの造り物の範囲ですわ。

(今) はあ、さいですか。やはり昔も信濃橋の陶器神社中心にやはり造り物がね。

(御) 今もそうですな。それで、陶器屋だけやないんですねん、鞆の連中が何処も皆金に力入れて造りもん拵えたんです。

(今) ああ、そうですか。今は何ですな、この瀬戸物屋の専業事業みたいな具合になってしもうて、瀬戸物祭りは瀬戸物屋にまかせておけということになったんですかね。

(御) まあ、それが費用が要るためにそんなことになったんですな。まあ、その時分でもええ加減に(相当に)造り物には金かかったんですね。

(今) ああ、いつの時代もなかなか苦心の結晶ですな。

(御) ところが、その今の人には、みな組合制度によってしてますね。備前屋市兵衛、常盤何々というような問屋があった時分には、皆個人でやっていました。

(今) そうらしいですね。

(御) しかも、それで・・・(不明瞭部分)を出して、自分の方じゃみな・・・(不明瞭部分)で、ほんまに祭りでした。ああ、立派なもんで。

(今) その頃の費用でどんだけかかりました？

(御) その時分でも、やっぱり四、五十円じゃろ。

(今) はあはあ。

(御) 米一升何銭という時分ですから。「今から思へば想像もつかない程物価の安い時代で、お米が四斗俵で一俵が一円五十銭位、お酒が四斗樽もかぶり一丁が六円時代ですから、やはり相当なもんでんナ。」

それで、小さい店ではとても出れない、組合のデング(連合力)でやるという方は出れなんだ¹⁰。みんな問屋が一手にするでしょ、そらまあみんな、そのお陰を蒙っていたわけですね。

(今) まあ何ですな、人が出るようになったから、あの店が出る、店を出すから、やっぱりくっついては人形を人の客寄せにするといった具合によって、どっちが先といたことはいないですね。

(御) 始めはそうでしょ。始めは本当に奉納してた。

(今) そうですね。

(2B面)

(今) そうですね。その人形を見にたくさん人が出てくるから、また店が

出る。

(御) あんまり人が出るので勿体ない言うことからやっただんてっしやるなあ、ははは(笑)。

(今) そうですな。

(御) その長い間、年々盛んになってますもんな。

(今) もう直に、陶器祭りでおますが、今から出し物や宣伝方法にいろいろ工夫凝らしてるんでしょな。

(御) もうそら、今からかからんことには、間に合わんようになって、まごついたら碌なことできませんわな。

(今) エー、何ですな。時に陶器商という名前は何時頃からですか？

(御) 陶器商という名はやはり、渡辺昇さん(大阪府知事、一八三八—一九一三)の時代です。

(今) はあはあ。

(御) 御維新で何もかも破談になってしまいました。造り物も何もかも破談になるくらいですから、一切中止でしたんやな。その時に西区長やらなどに、渡辺さんから呼び出しがあつて、相談されたらしい。

まず焼物屋ちゅう名を変ええと、今までは焼き物屋ちゅうてたんです。それを陶器商ということになって、明治六年(一八七三)からそうなったわけでしょ。「ごく昔は焼物屋と言いましたが、文化年

間に尾張家と横堀の解安(解屋安兵衛)とが一手引受の取きめが出来て後にはじめて尾張瀬戸の製品が盛んに取引されるようになってから、せとものやと言ふようになり、後に明治六年、時の大阪府知事・渡辺昇氏と西区長・金沢卯左衛門氏から横堀の業者へ組合の組織を勧告され、まづ第一に瀬戸物やという名称を陶器商と改めたの

がはじまりです。」

(今) はあはあはあ。

(御) それはその確かな文献がなかったんです。

(今) はあはあはあ。大阪には何ですか、今は土物ばかりですけど、昔は相当なかなか民芸的な焼物を焼いておったようですね。

(今) 石焼きではなかったです。みな土ですけどね。でもありました。大阪の今の市中ですな、西区とか南区とかいうところに、その時分は難波村とか、木津とかいうてましたが、ええー道頓堀に幸橋南詰東を入った所ですな、前は椿山いうて、後に久山いうてましたな。

(今) それが博覧会にも、三回も四回も博覧会に出品してました。「久山窯という本窯が明治十五年頃まで有って、ナンバ南通橋の南詰にも村上逸平窯が折部物を焼いて居ったが之れも明治末期に止めました。また明治三十六(年)迄、天王寺西門北へ行った所に芦山という本窯が有り、中々数へ立てると沢山有りますが、ナニワ区高岸町の藤重窯、御蔵跡の赤松など大正の末期までやってました」¹¹⁾

(今) はあはあはあ。

(中絶)

(今) そうですな、わしなんかも、まだ高津の表門の梅の橋という所に、十三軒吉向というのがありましたな。

(御) ええ、吉向。

(今) 大阪の清水の北坂の清月の楽焼の窯へも、よく注文に行ったもんですな。

(御) ああ、そうでしょ。

(今) あれは、みんな昭和に入ってから殆どみんななくなりましたな。そ

の後どうしたんでしような。

(御) 「それぞれやめたり、又京都へ行ったりしてしまいました。今はやはりホーラク、温室鉢の様な土物ばかりになりましたナー、」清月のおじいさんは亡くなりました。

(今) はあはあはあ。

(御) 吉向の枚方に居てる方のおじいさんも亡くなりましたな。

(今) はあはあはあ。

(御) 吉向は吉向でやはりありますね。

(今) はあはあはあ。

(御) 楽焼ではまず吉向ですな¹²⁾。

(今) やっぱり、そらなんですな、昔と違って、交通がこう便利になつたらば経費の安い産地がどんどん来るから「入荷するので」、大阪は一寸しにくくなりましたなあ「大阪の様な生活費の高い所ではやりにくいでせう」。

(御) 今はそうですな「せともの製造にはやはり大阪は向かないで、集散地であり消費地ですな」。

(今) いや、どうもいろいろ古いことや有益なこと、たくさん聞かせていただいて、ありがとうございます。たいへんに参考になりました。

(御) いや、どういたしまして。

二 戦前・戦後のせともの祭—盛衰する祭り—

「大阪アラベスク」における「大阪と陶磁器」では、昭和五年(一九三

〇) 刊の『大阪瀬戸物町の沿革』¹³⁾に既に記されているような歴史事象も

多く語られているが、大阪の郷土陶器の製作状況などを含めて、御崎と今井が収集した情報、見聞きした祭りや瀬戸物町の様子やその店構えの変化等についても多く発信されている対談と考えられる。特に筆者の関心からは、せともの祭の大正〳昭和戦前期の賑やかな様子が実見した人の口から生きいきと語られる点で、たいへん興味深い内容となっており、その祭りの盛衰が生業である陶磁器の製造・流通とも密接な関係にあることを示唆する構成となっていた。

ここでは、対談で語られたせともの祭の状況について肉付けをするため、新聞記事等により祭りの盛衰を追ってみたい。なお、近代・現代の祭りの歴史については、伊藤廣之による詳しい報告¹⁴⁾があるので、ここでは必要な事項のみを簡単に記すこととする。

明治末期の陶器祭の様子としては、『大阪朝日新聞』明治四十二年（一九〇九）七月二十一日付の「陶器神社の造り物」と題した記事に、

昨年座摩神社に合祀されし陶器神社は例年の如く二十三、二十四、二十五日の三日間祭礼を執行し西横堀一円の陶器商は倉浚への店を出し陶器人形の造り物をする筈にて（中略）西署及び東署は非番巡查を召集して境内は素より西横堀一円を警戒し各所に臨時の出張所を設けるよし

とあって、警察が非番巡查を警備に投入し、出張所まで設置するほど、陶器祭での西横堀の出入を警戒していることがわかる。また、明治二十四年（一八九一）の祭りには、大阪電燈会社が新町橋〳筋違橋間に弧光燈八个を設置しているが、これも天神祭と同等の扱いであり¹⁵⁾、大阪において大きな祭りとなっていた。なお、地蔵会廃止の翌年、明治六年に瀬戸物町（靱南通一丁目）に創祀された火防陶器神社は、明治四十一年に坐摩神社境

内へ移転し、この年に大阪陶磁器同業組合も設立されている。明治四十三年には神社の営繕を目的とした神陶会が組織されるようになる。

大正末期には、大きな祭りとなった陶器祭に陰りがみえるようになる。『大阪朝日新聞』大正十四年（一九二五）七月二十三日付の記事「陶器神社大阪名物の一つ陶器の『造り物』」には、大阪名物と称えられながら衰退する祭りの事情が述べられている。

（略）そんなわけで夏祭りというふほどのものではないが、二十三、四、五の三箇日の祭礼間は町内に陶器の『造りもの』を一般に見せるのと安価な陶器類を売るので人足が多く、大阪名物の一つである、本年の造りものは靱中通一丁目先濱地に本紙夕刊所載の鞍馬山牛若丸を始めとし児島高德、鬼一法眼菊畑、鈴ヶ森、暫、恵美須鯛釣り、名工柿右衛門、点の網島、小野小町などでこの費用ザット二千余円同業組合では語る『靱の干物人形が中絶し道修町の造りものも翳り陶器神社の造りものも年々同業者が他の便利のよい土地に移転するので負担が重くなりともするとさびれ勝ちです、大阪の名物をなくしてはと有力者が力コブを入れ来年から十五六箇町に規模の大きい造りものをするつもりです』と力んでいる

造り物製作の高額な経費、陶器商の移転による減少とそれによる負担の相対的な増加という祭りの構造的な問題が浮上していたのである。祭りが寂れゆく問題を解決するため、翌大正十五年には、横堀筋の住民と陶器商の同業者による横堀会が発足し、祭りを支える体制づくりが行われた¹⁶⁾。

戦時中には「折武運長久」等の戦時色が濃厚な造り物も出されるようになるが、昭和十八年には造り物や陶磁器の売出が中止され¹⁷⁾、翌年には陶器祭も中止となる。「大阪アラベスク」の対談で語られた通り、昭和二十年

三月の大阪大空襲で火防陶器神社、瀬戸物町は焼失する。

戦後、再び瀬戸物町の焼け跡に火防陶器神社が再建され、祭りは「せともの祭」として復活する。陶器業者と協力者による「横陶会」が発足して祭りを支え、境内には陶器造り物「蘭陵王」が奉納され、瀬戸物の売出しも行われた¹⁸⁾。その後、造り物の数は翌年二箇所、翌々年には三箇所となり、祭りの主体が横陶会から大阪府陶磁器協同組合に移る昭和三十一年（一九五六）以降は五箇所が通例となる。昭和三十一年（一九六四）には阪神高速道路の建設のため、火防陶器神社が撤去となり、同四十一年に坐摩神社境内に再建されるが、その間の昭和四十年には造り物を一〇箇所出すこともあり、戦後の祭りの最盛期を迎える¹⁹⁾。

戦後の祭りの盛況ぶりを伝える昭和三十一年七月二十一日の『読売新聞』には、

22日から始まる真夏の呼びもの浪速名物「せともの祭り」の作り物（陶器作り人形）が20日朝出来上り道行く人の足を止めた。（中略）信濃橋から四ツ橋まで西横堀筋約八町の間に地元、全国の業者約八百が軒を並べ深夜の午前2時まで納涼客の目を楽ませる。火防陶器神社（阿波座中通一丁目）に奉納される人形は郷土の人形師紙谷洲楽、竹田龍翁の手になる「雨月物語」「平将門」など五体（制作費一体約十万円）今年では地方の観光客誘致をねらって近畿一円のバス会社が協賛、臨時の駐車場まで設けるといふ。期間は26日まで。

とあって、深夜まで多くの陶磁器の出店があり、納涼客で賑わい、観光客誘致のために観光バスの臨時駐車場設置の計画もあったことがわかる。また同年の『産経新聞』七月二十六日付には、「夏枯れふっ飛ばす二十万人せともの祭」と題した記事があり、出店数は二百軒と『読売新聞』とはズ

レがあるが、二十二、六日に二十万人の人出があり、特に二十五日午後十時以降には天神祭の帰り客が合流してその混雑ぶりが相当なものであったことを伝えている。

「大阪アラベスク」で語られた造り物製作費一体一〇万円は昭和三十年前後の概算額らしく、翌三十二年には一体一五万円と伝える記事がみられる²⁰⁾。当時として相当高額な経費をかけて陶器造り物を製作しているが、昭和三十年前後の記事では、祭り期間中の売り上げを一、三千万円と記しており、造り物製作費を十分にまかなえる効果があったと考えられるのである。

前掲の『読売新聞』にあった人形師紙谷洲楽と竹田龍翁は、戦前・戦後期の造り物製作を担った人物である。紙谷は、大阪市内で燕焼を制作していた陶器製造業者でもあり、その縁で造り物製作に携わるようになったと思われる。竹田はその弟子筋である。その後の製作は竹田の弟子筋となる重松人形店に移るが、戦前においても祭りの支出の半分を占めていた造り物製作費は、この頃にはさらに高額となって祭りの財政を圧迫していった²¹⁾。

明治期からほとんど毎年のように新聞に取り上げられてきたせともの祭や造り物は、昭和四十年代以降はその記事がみられなくなっていく。マスコミの注目度は祭りの衰退傾向とも関係しており、平成十二年で旧瀬戸物町での祭りは最後となり、十四年に復活した祭りは坐摩神社境内を中心とするものに変化していた。

おわりに

せともの祭の衰退要因は、「大阪アラベスク」ですでに語られていた。店

構えの変化、陶器商の減少、高額な造り物製作費などがそれである。造り物の展示に使用していた土蔵からショーウィンドウという店構えの変化は、店舗での造り物の展示自体を不可能にした。また都市計画においても駐車場確保等が困難な状況となり、観光客誘致の観光戦略を遂行することはできなかつたようである。また陶磁器が現代の日常生活に占める地位自体も変化し、瀬戸物市の集客力も低下していったと考えられる。それにもまして最大の要因は、高額な造り物製作費であり、減少した陶器商や地域住民だけで支えられるものではなくなっていたのである。

現在のせともの祭は、祭りの最大の特徴であった毎年の瀬戸物一式造り物の新作製作・展示が失われ、かつての出入を想像することもできない規模になっている。陶磁器流通という浮沈のある生業と密接に結びついた祭りにとって、盛衰は避けられないことであった。

註

- (1) 近世の地誌類、『摂津名所図会大成』などに記述がある。
- (2) 「陶器祭と造り物」『陶業時報』一九三二年七月号。
- (3) 『館蔵資料集9 せともの祭造り物写真真等資料』大阪歴史博物館、二〇一三年。
- (4) 『陶業時報』は明治三十九年（一九〇六）二月〜昭和十八（一九四三）年十一月まで、御崎善右衛門が発刊した業界誌で、商業陶器の商品・流通情報、郷土陶器調査、瀬戸物町の歴史等について掲載する。
- (5) 『大阪陶報』は、昭和二十八年（一九五三）一月創刊、当初は大阪陶報編集局発行、七月から大阪府陶磁器商業協同組合発行。昭和三十三年頃に『陶報』に改称し、昭和三十六年頃まで発行された。
- (6) 『毎日放送十年史』株式会社毎日放送、一九六一年。

- (7) 八〇メートル道路は中央大通のことか。また片側町については、戦時中の建物疎開によって防火のため浜側の家の移転が推奨されていたという。
- (8) 陶器祭に電灯が設置されたのは明治二十四年（一八九一）に大阪電燈会社による設置が初めてか（『大阪朝日新聞』七月二十四日）。
- (9) 靱の乾物問屋による塩乾物造り物を指すものか。
- (10) 近世の瀬戸物一式造り物番付には、「組合」「辻合」という複数の者が組んで造り物を出展する形態がみられる。
- (11) 『なにわの陶業史』（大阪府陶磁器商業協同組合、一九八二年）に、『陶業時報』等を参考にした郷土陶器の一覧が掲載されている。
- (12) 吉向窯は現在も大阪府内において制作活動が継続されている。
- (13) 田中天涯編『大阪瀬戸物町の沿革』泉林藤七発行、一九三〇年。
- (14) 伊藤廣之「西横堀における陶器祭と造り物―同業街の祭りと社会―」『大阪歴史博物館研究紀要』第一〇号、二〇一二年。
- (15) 註8に同じ。
- (16) 「陶器作り物の今後の方針」『陶業時報』一九二六年六月号。
- (17) 「火防陶器神社（大阪）夏祭の概要」『陶業時報』四五〇号、一九四三年八月。
- (18) 註3の館蔵資料集には、復興したせともの祭の陶器市準備風景を収録。
- (19) 造り物の一覧等については註3館蔵資料集を参照。
- (20) 『産経新聞』一九五七年七月五日。
- (21) 『陶業時報』一九二六年九月号掲載の「横堀会の決算」の収支による。

「謝辞」本稿の作成にあたっては、つば善商店の御崎正之氏に様々なご助言、ご教示を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。